

審査の結果の要旨

氏名 渡邊 敏 恵

本研究は、関東圏内に在住する在宅要介護高齢者を対象に 2003 年 3 月から 2004 年 9 月にかけて半構造化面接を行い、質的に分析したものである。研究目的は、1) 要介護状態になることによってどのような喪失や困難を経験しているのか、2) それに対してどのような戦略を用いて対応しているのか、3) 幸福感を得るきっかけとなる具体的なことがらは何のようなものか、4) 幸福感をどのような基準で評価しているのか、の 4 点を明らかにすることを通じて、継続理論の展開への寄与を図り、実践や施策への示唆を得ることであり、下記の結果を得ている。

1. 喪失と困難：幸福感を脅かすもの

研究協力者（以下、協力者）は、「心身機能の衰えによる日常生活上の困難」、つまり、日常生活動作の困難さ、情報の理解の難しさ、見知らぬ人とのやりとりの難しさ、生活習慣の変更、を経験していた。「改善する手段のない疼痛と不快感」に悩まされている人もいた。また、自己実現や役割遂行の「生きがいを失い、獲得が困難」になった経験が語られた。病状の悪化や、経済的問題、介護家族についての「将来への不安」を感じていた。

「疼痛と不快感」が強い場合や「生きがい」の実現が困難な場合には、混乱したり、生きる意味を見失ったりしており、これらに対応していくことの重要性が確認された。

2. 幸福感を得るための戦略

喪失や困難のある中で、協力者は、「目標を再設定する」、「残存能力を豊かにする」、「人的・物的資源を用いて喪失を補う」戦略を用いていた。「目標を再設定する」には、回復をめざす、現状を維持するという、過去とつながりのある目標があったが、新たな目標を設定する場合もあった。「残存能力を豊かにする」には、訓練をすることと同時に、無理をせず用心することがあげられた。「人的・物的資源を用いて喪失を補う」ために、人的・物的資源を受け入れ、人的資源利用では工夫と交渉をし、物的資源を利用することや、将来のために人的・物的資源を備えることもされていた。

上記以外の認知的な戦略として、他者や自分の過去などのより悪い状況と比較したり、よい部分に注目したりする、「よいことをさがす」があげられた。また、割り切る、将来の不安に目を向けないという、「深刻に考えない」戦略も認められた。

3. 幸福感を得るきっかけとなる具体的なことから

どの協力者も楽しみを感じるものはあると述べていた。「症状の改善につながるもの」として、休息と入浴、治療の効果、身体機能の訓練、「アクティビティ」として、能動的な創作や外出・旅行と、飲食やテレビ視聴などの受動的なアクティビティがあげられた。また、周囲の人々との交流や、周囲の人々の役に立つ「対人関係」、「居住環境」、「介護保険等の制度」があげられた。失った生きがいや楽しみに関する「代わりの手段」、あるいは「思い出すこと」が、協力者に継続の感覚をもたらしていた。

以上の項目は、欧米の質的研究の結果と類似しており、日常的な、いわゆるささやかな性質をもつものであった。しかし詳細をみると、受動的なアクティビティにも意義があること、介護家族に果たす間接的な役割が重要であること、亡くなった人をしのぶ信仰のあり方に、日本的な特徴があるものと考えられた。

4. 幸福感の評価基準

喜びや安心感が得られる「喜び・安心感を得ている」ことが協力者の幸福感の基準となっていた。また、「期待が充足している」ことによって幸福が得られていると評価されていたが、最低限の期待が満たされていれば幸福と語る人もいた。一方、介護が必要な状態になり喪失や困難があっても、「前向きな生き方をしている」ことに価値が置かれていた。

「喜び・安心感を得ている」「期待が充足している」は *hedonic well-being* の概念と重なり、「前向きな生き方をしている」は *eudaimonic well-being* に通じるといえた。欧米の *eudaimonic well-being* の概念の一つである「肯定的自己観」はほとんど語られることがなく、自己を批判したり謙遜したりすることが望ましいとされる日本の社会規範が影響したものと考えられた。

以上、本論文は、これまで調べられて来なかった日本の在宅要介護高齢者の幸福感について、その詳細や特徴を初めて明らかにしたものであり、今後の在宅要介護高齢者の支援に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。